

STAGE 6 説明的文章(自然科学)

解答(P 51～57)

- 3 (ア) 2 (イ) 4 (ウ) 1 (エ) 1 (オ) (例) 道德を技術で置き換えるのは社会を荒廃させてしまう危険があるので、人間の道德心を涵養し、判断力のある人間であり続けることが必要だろう。(66字) (カ) 3

解説

- 3 (ア) 空欄Aでは、空欄の後で、前の部分を否定する内容が続いているので、逆接の接続詞が入る。また、空欄Bでは、類似した内容の別の具体例を続けて述べているので、並立の接続詞が入るとわかる。
- (イ) 「肩代わり」とは「負担を一方から他方にうつすこと」という意味。つまり道德の役割を技術が代わりに行っていることを表している。
- (ウ) 空欄2の直後にある「薄れさせてしまった」を手がかりにすると、本来なら、使い捨てはよくないことだという道德心が働くことから、「後ろめたさ」(引け目を感じる)が適切である。
- (エ) 傍線部と同じ段落の冒頭の文の内容を指す。つまり、「地球に優しいと自ら感じたことを自発的に実行し、生活まで変えていくとする」発想のこと。
- (オ) 傍線部の直後の段落に、筆者の主張がまとめられているので、根拠の部分と、そうならないためにどうするかを、制限字数内でまとめる。
- (カ) 3の「人間の道德心はだんだんと養われていき、いい社会に変わりそう」の部分があてはまらない。

STAGE 7 論述の資料読み取り問題

解答(P 58～65)

- 5 (ア) (例) 一方で、日本の高校生は、すべての項目で半数以下の割合にとどまっています。(36字)
- (イ) (例) 中学生の中には、自分に対して抱く理想と現実との差異に直面して悩む人も多いが、現在の自分の生き方や現在の自分の存在そのものを、もう少し尊重する意識を持つことが大切だということです。(89字)

解説

- 5 (ア) 表から、「自分は優秀だと思う」、「自分は価値のある人間だと思う」、「自分にはできることがたくさんある」というすべての項目において、日本の高校生の割合が「半数」以下であることを読み取ってまとめる。
- (イ) Bさんの発表のまとめである「自分に対して抱く理想と現実との差異に直面して、悩んでいる中学生が多いのではないかと考えました」という部分と、Cさんの発表のまとめである「現在の自分の生き方や現在の自分の存在そのものを、もう少し尊重する意識を持つことが大切ではないかと思いました」という内容とを、うまくつなぎ合わせて書く。

③ (ア) 2 (イ) 3 (ウ) 1 (エ) 4 (オ) 2 (カ) 3

解説

③ 第一段落で、女の子が鷺に連れ去られて、父母が必死に追いかけていることが書かれているので、ここでは子どもを取り戻すことをあきらめたのである。

(イ) 「奪はれじ」というのは、「奪われまい」という意味である。つるべを奪われないように争っているのである。

(ウ) 「この女の子を罵りてはいく」とあるので、その郷の女の子たちが言ったとわかる。したがって、「己」(あなた)は、宿の家の女の子のことだとわかる。

(エ) 「それゆゑ」の「ゆゑ」は「故」と書き、「理由・わけ」のこと。ここでは、女の子が泣いている理由である。「……罵りて打つ。家の女子打たれて、泣きて家に帰る」とある。ののしられて、ぶたれたのが泣いている理由である。

(オ) 「何の故に」は「なぜ」という意味で、疑問を表す。したがって、「なぜ……言うか」という疑問を表していることをつかむ。

(カ) 「それ」は、郷の女の童部が聞き伝えた内容である。聞き伝えたのは、家主が女の子を見つけて育てるようになったいきさつである。

(キ) 「あさまし」は、良いことにも悪いことにも、「驚きあきれるばかりである」「意外だ」という意味で使われる。また、「嘆かわしい」「興ざめだ」や「とるに足りない」「みすばらしい」の意味もある。現代語では、「心が卑劣だ」「さもししい」の意味で使われる。古語でも、あまり多くはないが、この意味で使われることもある。

家のあるじが、女の子に「どうして泣くのだ」と聞いたところ、女の子は泣くばかりで、その理由を答えない。その時、但馬の泊まり客が見ていたことなので、あったことの様子をくわしく語って、また言うには、「そもそも、この女の子を、どうして鷺の食い残しなどと言うのですか」と聞くと、家のあるじが答えて言うには、「ある年のある月のある日、私が鳩の巢にものを落してしまった時、幼い子どもの泣く声がしたので、その声を聞いて、巢に近寄って見ましたところ、生まれたばかりの子がいて泣いていたのを取り下ろして、それを育てた女の子なので里の女の子たちもそれを伝え聞いて、ののしりたてたのでございましょう」と言うのを、この但馬の泊まり客は、これを聞いて、「自分こそ昔、子を鷺に取られて」と思い出して、思いめぐらすと、「ある年のある月のある日」と言ったのを聞くと、それは但馬の国で鷺に(子を)取られた年月にぴたりと当たるので、わが子ではないかと思ひ出して言うことには、「それでは、その子の親という者はわかっているのですか」と聞くと、家のあるじは「その後、まったく(親のことは)わかりません」と答えたので、泊まり客は「その事でございます。このようにおっしゃる時に思い出したのです」と言つて、鷺に子を取られた事を言うと、家のあるじは意外なことに驚きあきれて、女の子を(泊り客と)見比べてみると、この女の子は、この泊り客に姿形がまったくちがうところがないほど似ていた。家のあるじはそれならば本当なのだあと信じて、同情すること限らない。泊まり客もそういう因縁でここに來た事を言い続けて、泣くこと限らない。

家のあるじはこのように因縁が深く、行き合った事を悲しんだが、(女の子を渡すことを)惜しむことなく許した。「ただし、私もまた何年も養育てたので、実の親とかわりません。そうであるから、共に親として育てましょう」と約束して、その後は、女の子は但馬にも通つて共に親として暮らしたのだった。

(ク) 文章の最後に、「その後は、女子、但馬にも通ひて共に親にてなむありける」とあるので、女の子が但馬と丹後の国とを行き來して二人の親に育てられたことがわかる。2は「一度だけ但馬の家にも行った」が誤り。3は「別人だとわかり」という内容は書かれていない。4は「里の子どもたちと仲良くなった」ということは書かれていない。

【口語訳】

今となつてはもう昔のことだが、但馬の国(現在の兵庫県北部)の七美郡、川山の里に住む者がいた。その家に一人の生まれたばかりの子がいて、庭を這つていたが、その時に、鷺が空を飛んで渡つていて、この生まれたばかりの子が庭で這っているのを見て、飛び下りてきて、生まれたばかりの子をつかみ取つて空に昇つて遙か東に向かつて飛んでいってしまった。父母はこれを見て、泣き悲しんで追いかけて取り戻そうとするが、遙か(高いところに)昇ってしまったので、どうすることもできず追うことをあきらめた。

その後十年あまりが経つて、この鷺に取られた子の父が、用があつて、丹後の国(現在の京都府北部)の加佐の郡に行った。その里に住む人の家に寄つた。その家に幼い女の子がいた。年は十二、三歳ほどである。その女の子が大通りにある井戸に行つて水を汲もうとすると、(ちょうど)泊まつている但馬の国の者も、足を洗うためにその井戸に行つた。そうすると、その里の幼い女の子たちがたくさんその井戸に集まつて水を汲んでいて、この(男が)泊まつている家から來た女の子の持つてくるつるべを、その里の女の子が奪つた。(男が泊まつている)家の女の子はこれを惜しく思つて、奪われまいと争つていたところ、里の女の子たちは皆ぐるになつて、この家の女の子をののしつて言うには、「おまえは鷺の食い残しだぞ」と言つて、ののしつてたたく。家の女の子はたたかれて泣いて家に帰る。この泊まつている男も帰つた。

STAGE 1 文法・敬語表現・短歌俳句

③	(ア)	4	(イ)	3	(ウ)	2	(エ)	4	(オ)	1	(カ)	2
(キ)	3											

解答(P256)

③ (ア) 短歌の終わりが「群」という名詞で終わっていることから、4の「体言止め」と判断する。「群」という名詞で終わることによりこの短歌に余韻が生まれ、川の中で遊んでいる「鮒の子の群」に対して、筆者がしみじみとした感興を抱いていることが伝わってくる。

(イ) 短歌の中に「われを覗けり」とあるが、この「覗く」という行為の主体が「萱」や「芒」という人間以外のものであることに着目し、比喩の一種で、人でないものを人に見立てて表現する技法である3の「擬人法」が使われていると判断する。「萱」や「芒」が風に揺られている様子が、自分の心をのぞくために動いていると表現することで、のぞかれては困るような心の中の弱さを筆者が持っていて、それが負い目になっていることが暗示されている。

(ウ) (大意)「家の戸を引くとすぐに、まるで戸が開くのをまっていたかのようにすべりこんできたよ、光というものが。」

短歌の中に「すなはち待ちしもののごと」とあるが、戸を開けるやいなや、瞬間的に差し込んだ光の様子を「待ちしもののごと(＝待っていた人のように)」と、直喩(「ごと」は「ごとし」と同じ意味)を使って表現することによって、光の躍動感や生命感が表現されている。また、最後の部分に「光といふは」と倒置法を使うことで、「光とはこのようなものであったのか」という作者の新鮮な感動や驚きが表現されているのである。1は「太陽の光に対して敵意や不快感をむき出しにしている」、3は「光にやさしく包み込まれているような感覚」、4は「光が差し込んでこない暗い家の中」、「屈折した感情をもてあまし、苦悩している」の部分が、それぞれあてはまらない。

「君が手もまじるなるべし／花薄」という二句切れの秋の句であり、「花薄」と体言止めが用いられている。「まじるなるべし」は、混じっているのであらう、混じっているに違いない、という詠嘆が込められている。また、花薄とは、穂の出たすすきであり、秋の季語だが、「枯れすすき」、「枯れ尾花」などでは冬の季語となるので気をつけない。1は「切れ字を用いて」、3は「直喩法を用いることで」、4は「対句法を用いることで」の部分が、それぞれあてはまらない。

(キ) (大意)「いつのまにか春の名残となつてしまったなあ。昆布干場にひっそりと咲くたんぽぽの花が。」

三句に「けり」という詠嘆の助動詞が用いられている。1は「春が終わろうとしていることへ作者の驚き」、2は「夏が来ることへの期待感」、4は「可憐な様子を写實的に描き出す」の部分が、それぞれあてはまらない。

表現技法のまとめ

1 おもな表現技法について

比喩(たとえ) あるものを他の類似したものを借りて言い換える。

①直喩(明喩) …「このようだ」「～みたいだ」「～ごとし」などの言葉を用いてたとえる。

(例) 心を開くかきのようなものを手に入れる。

②隱喩(暗喩) …直喩で用いる言葉を使わずにたとえる。

(例) 心を開くかきを手に入れる。

③擬人法…人でないものを人に見立てて表現する。

(例) 海がぼくを招き入れている。

体言止め

文末を名詞(体言)で止めることにより、印象を強めたり、余韻(終わったあとに残る味わい)を残したりする。

(例) 私が一番好きな季節、それは秋。

(エ) (大意)「雪の上にはぼったりと落ちてくるようにやってきたよ、うぐいすが。」

俳句の中に「ぼったり」とあるが、これは、物が落ちる時に使う擬態語「ぼたり」を強調して表現したもので、うぐいすがぼったりと落ちてきたと独特の表現をしているところが、この俳句の中心部分といえる。うぐいすがやってきた様子を「ぼったり」と表現することで、うぐいすに対する筆者の愛情が感じられるのである。また、うぐいすは別名「春告げ鳥」といわれるように、春の訪れを知らせる鳥として、古代から和歌などに詠まれてきた。そのうぐいすが、鳴き声を聞かせるのではなく、筆者の前に姿を現すことで春の訪れを感じさせていることにも注目したい。うぐいすの登場によって春が近づいてきたことが実感できた筆者の、うきうきする気持ちも読み取ってほしい。1は「うぐいすが元氣よく春の訪れを村々に告げてまわる声を聞いた」、2は「雪の上で愛きようをふりまいているうぐいすの姿を写實的に描き」、3は「寒さに負け、助けを求めるかのようにして自分の目の前に現れたうぐいす」、「自然界の残酷さ」の部分が、それぞれあてはまらない。

(オ) (大意)「雪の中を喜んで遊びまわっている子どもたちに降る雪の、なんと美しいことよ」

雪の中で無邪気に遊んでいる子どもたちとその子どもたちに降る雪を主題として詠んだ俳句である。また、この俳句が、五・七・五という俳句の定型音数にとられずにつくられた「自由律俳句」であることにも注目しよう。2は「擬音語と擬態語を用いて」、3は「雪にうんざりした作者の気持ち」、4は「体言止めを用い」、「見たこともないような鮮やかな雪」の部分が、それぞれあてはまらない。

(カ) (大意)「別れに手を振る君の姿は見えなくなってしまったが、秋風にそよぐ薄の穂波のなかに君の手もきつと入っているのであらうね」

倒置法

言葉の順序を入れかえ、感動を強調する。

(例) いつかきつと行きたい、あの空の向こうへ。

反復法

同じ言葉を繰り返して、印象を強める。

(例) 見て、見て、あの夕日を見て。

対句法

形がそろい、意味の面に対(反対の内容、似た内容のどちらでもよい)になる語句を並べる。

(例) 顔で笑って、心で泣いて。

2 短歌・俳句における独特のきまりについて

句切れ

短歌や俳句の意味や調子が大きく切れる部分という。短歌の場合は、現代語に訳したときに句点(。)が付けられるところを目安とし、俳句の場合は、「切れ字」(「ぞ」「や」「かな」「けり」などの語)によって判断する。また、俳句の切れ字は、その俳句の中心を表しているのので、解釈をする上で特に重要となる。

破調

「字余り(五音となるべきところが六音以上に、七音にすべき所が八音以上になるなど、一定の字数より多いこと)」や、その反対の「字足らず」がある。余韻を残したり、感動の中心を表したりする効果をもつ。

季語

俳句において、句の季節を示すために詠みこむように特に定められた語。(五・七・五の定型音数で季語がないものを「川柳」という。)